

## 英米文化学科1年生のみなさんへ

『英米文化学科1年生に薦めたい本—第1集—』の発行(2009年)から3年が経過し、その間、教員の異動もありましたので、ここに第2集を刊行します。

この小冊子は、英米文化学科の教員にそれぞれの立場から推薦してもらった図書リストです。多くは各教員の専門分野を反映したものになっていますが、なかには専門を離れて、是非皆さんに一度は手にとって読んで欲しいというものも含まれているに違いありません。また、「1年生に薦めたい本」と謳ってはいますが、上級年次の皆さんにも是非参考にして頂きたいと思います。

第1集と同様、各教員には一人5冊、しかもできるだけ廉価で入手しやすい文庫本や新書本を中心に選書するように依頼しました。したがって、リストとしては必ずしも十分なものとは言えませんが、なかには品切れ・絶版になっている書物も含まれているかもしれません。その場合は、図書館、古本屋、あるいはインターネットなどを利用して、是非お薦めの「宝物」を探し出してください。

英国の哲学者フランシス・ベーコン (Francis Bacon, 1561 - 1626) は『隨筆集』のなかで、次のように述べています。

Some books are to be tasted, others to be swallowed, and some few to be chewed and digested; that is, some books are to be read only in parts; others to be read but not curiously; and some few to be read wholly, and with diligence and attention.

(書物のなかには味見をするためのものもあれば、飲みくたすためのものもある。なかには少数ではあるが、咀嚼すべきものもある。つまり、書物にはところどころ読めばいいものもあり、ざっと通読すれば足るものもあり、また少数だが、全部を、それもまじめに精読すべきものもある。—外山滋比古ほか訳、一部改訳)

現在、書店の店先だけを覗いても、いろいろな書物が所狭しと並べられていますが、そのなかから自分に滋養を与えてくれる良書を選び出すのは至難の業で、それなりの「嗅覚」が求められます。この小冊子に挙がっている書物を手がかりにして、読書の幅を広げるとともに、「咀嚼すべき」そして「精読すべき」良書を嗅ぎ分ける「嗅覚」を養うことに些かでも皆さんのお役に立てれば幸いです。

18世紀に『タトラ』という週三回発行の新聞を創刊したリチャード・スティー爾 (Richard Steele, 1672 - 1729) は「精神にとって読書とは肉体に対する運動のようなものである」(Reading is to the mind what exercise is to the body.) と述べています。肉体を鍛えるために運動が必要なように、精神を鍛えるには読書が必要です。とりわけ人文学部の皆さんには、この知的な精神の鍛錬が求められます。このリストに掲載されている書物を通して、皆さんが知識と教養を身につけ、人文学部英米文化学科の学生として豊かな大学生生活を送られるよう期待します。